

DIGITABLE 第 35 回勉強会レポート

2010年5月15日 於：江東区森下文化センター（第一研修室）



デジタルフォト基礎講座 2 「ホワイトバランス」：高木大輔 講師

参加者全員による “ライトニングトーク Vol.2” (持ち時間 5 分のショートトーク)

Photoshop 研究講座 「カメラ RAW の詳細」：平野正志 講師

DIGITABLE 写真技術勉強会 (HOME) <http://www.digitable.info>

デジタルフォト基礎講座 2 「デジタルカメラの設定②ホワイトバランス」：高木大輔 講師

デジタル画像の良し悪しを決める技術上の要件は露出とホワイトバランスだ。前者は基本的にはフィルム時代からの技術的要件をデジタルカメラに置き換えたものだったが、ホワイトバランスはデジタルカメラならではの特徴的な技術要件で、画像の美しさという点では決定的な要因となる。

光にはいろいろな種類や状態がある。人間の目はどのような状況でも白いものを白と認識できるが、カメラにはそれができない。たとえば、太陽の光は日中は白い光だが、朝や夕方には赤い光になる。また、電球の明かりは赤く、蛍光灯は青っぽいといった具合で、それらが色かぶりの原因となり、不自然な色調の写真になってしまうのだ。

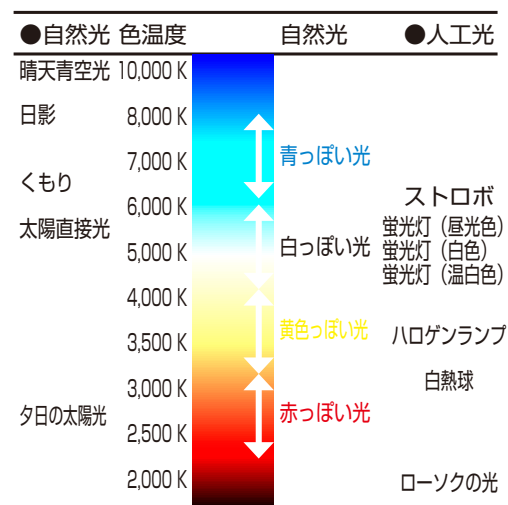
この色かぶりは銀塩写真ではデライトタイプとタングステンタイプのフィルムを使い分け、さらにレンズの前に色温度変換フィルターや色補正フィルターをかけた、プリント時に補正してきたが、これらのフィルターワークは経験や熟練を要した。デジタルカメラでは「ホワイトバランス」の設定だけで解決でき、たいへん便利になった。

これは、光の種類や状態に応じてカメラの色再現を補正して常に白いものは白く、グレーはグレーにする機能で、適正に設定すれば自然な色調の写真にすることができる。

最近の機種ではホワイトバランスの「オート」は高精度になり、比較的良好な結果が得られるようになった。しかし、それでも光や被写体の状態などによってはわずかに偏った色調になったり、補正が利きすぎて地味な感じになることがある。そのため、思い通りの色再現を得るためには、やはり光の種類親状態に合ったホワイトバランスに設定したほうがよい。もちろん、1コマごとに設定を変更することができて、逆に意図的に色かぶりさせて個性的な作品作りに生かすなど、ホワイトバランスの特性を逆手に利用した表現も可能だ。

講義では高木講師がフィルム時代に実際に使用した、LB（ライトバルancing）やCCフィルターを持参して説明。またこれらがPhotoshopのフィルター効果にも継続されていることの紹介もあり、会員の関心を引いた。また人物撮影におけるグレーボードの使い方などの熱心な質問もあった。

(コメントや意見の追加をお願いします)



いろいろな光と色温度 (作成：高木大輔)：色温度は物体が熱せられて暗い赤から黄色～白～ブルーに変化するという理論で絶対温度 = K (ケルビン) で示される



(左) 5000 K / (右) 3000 K に設定：ホワイトバランスをわざとずらすことによって作品効果を狙うことも出来る

参加者全員による“ライトニングトーク” (持ち時間5分のショートトーク)

先月から始まった新企画だが、早くも会員の旺盛な好奇心と発表精神に持ち時間オーバーが続出する状態だ。今月もいくつかの要旨をピックアップする。

KUさんは通いなれた新宿御苑のフィールドで蜘蛛の美しさに魅入られ撮影を続行中である / KM氏はパノラマ写真の報告の第二弾。縦構図の被写体として成長中?の東京スカイツリーを選んだ / A氏はホワイトバランスが変わると露出にも影響があることに注目し、色相ごとの調整による変化を研究中である / SZ氏は奥多摩撮影行でのスライドショー。投入したばかりのPanasonic L MIX Gも快調のようだ / SI氏はそのカメラを勧めた元祖?だが、写真とともにそのカメラの楽しさを紹介 / IT氏は奥多摩撮影行及び仲間との共同HP制作で見つけた効果的なスライドショーの方法を紹介 / HR氏はライフワークのデジタルアーカイブから、JERRY UELSMANNの写真集紹介。デジタルと見まごう合成作品だがシュールな感性に圧倒される / SR氏は上陸したばかりのiPadの紹介。デジタル通ならではの使いこなしに各会員の注目を浴びた / IMさんはツイッターを開始。今後もその効果を発表とのこと / TK氏から今月のロケで再認識した記念撮影の重要性。写真の原点としての記念撮影の勧め … 等々である。

(コメントや意見の追加をお願いします)

Photoshop 研究講座「カメラ RAW の詳細」 平野正志 講師

フォトショップの「カメラ RAW」では露出やホワイトバランスなど基本的な調整しか行わないことが多いが、かなり詳細な調整メニューが隠されている。

角度補正、スポット修正、補正ブラシなども使い易く、JPEG補正のように画像を痛める心配もない。ここでは特に、グラデーションをともなった部分補正が可能な段階フィルターを取り上げる。

マウスのドラッグでポイントした部分から離れた部分へと調整幅が出来る(面での調整)。はじめに選択した部分が緑の点になり、終点の赤い点までの間は調整にグラデーションがかけられるようだ。始点から後ろに大きく効果がかかり終点までの幅でグラデーションで調整がかかる。上の例では露光量を減らしているの、緑の点(始点)の左では黒ツブレが強調されて増えている。赤い点(終点)までの間にはグラデーションで効果が調整されている、赤い点から右は効果なしとなる。

このような機能の使いこなしでRAWファイルの状態のまま、かなりの調整が可能だ。

尚、これらRAWでの調整フローでは調整を記録するタグ=xmpと画像をセットに保管する必要がある。

講義後は参加者から「xmpを別に作れば、何通りかの調整が出来るのか？」等の質問があったが、別の会員から「RAWファイルをコピーして別の画像として、それぞれに別の調整をして、個別のxmpをつけた方が管理し易い」などの指摘もあった。いずれにせよ、各会員のRAW調整の関心は高いようである。

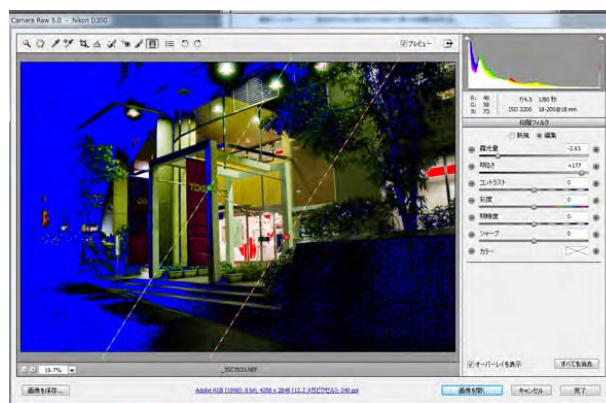
追記*「調整ファイルの多数保存に関して、xmpに別名で1, 2, 3などの調整番号をつけておき、必要に応じて先頭番号を外して元のファイル名に戻せば調整ファイルとして読み込めそうです。」(平野)

(コメントや意見の追加をお願いします)

DIGITABLE 写真技術勉強会 (HOME) <http://www.digitable.info>



平野講師による授業風景



カメラ RAW : 段階フィルターの使用例



今月の1枚: 注目のiPadがDIGITABLEにやってきた! S R氏を囲んで羨ましそうな面持ちの会員の輪が出来る...